

# いくさ物語表現史 (三)

——保元物語における登場人物——

山下宏明

## 一 物語と登場人物

鳥羽院、白河院ノ御アトニ世ヲシロシメシテ、保元元年七月

二日、鳥羽院ウセサセ給テ後、日本国ノ乱逆ト云コトハヲコ

リテ後ムサノ世ニナリニケルナリ。コノ次第ノコトハリヲ、

コレハセンニ思テカキヲキ侍ナリ。(愚管抄・四)

鳥羽院崩御の後の世を乱逆の世と見て、その時代変化の道理をきわめ、

心ヲモヤスメント思テ(卷三)

慈鎮は『愚管抄』を書いたと云う。動乱にともなう混乱した状況をとらえるために慈鎮は独自の道理を用いようとした。状況の中に身を浸してはわからない、みずから身を置く状況をとらえるためには、現実を相対化するための方法が必要である。これを虚構と言ふ。それは状況を相対化して描くための方法である。言い換えれば表現方法に虚構がある。その表現方法を構成する要素として、  
○ いかなる素材を選択し、どのように配列するか。

○ いかなる人物をとりあげ、とりあげた人物を相互にどのように関係づけるか。

○ それらの人物をどのように行動させるか。

○ どのような言葉を使用するか。

がある。要するに、この場合、保元の乱をどのように相対化してゆくに虚構がかかっている。慈鎮が、従来の世継に代わる表現方法を模索した(卷三)ことが、すなわち虚構の模索であった。慈鎮が、その存在を知っていたかどうかは不明だが、世にいくさ物語と称する虚構の方法が存在していた。今日、軍記物語と呼ぶ『保元物語』などである。

ところで、この虚構としての表現を進める一つの要素に登場人物がある。物語への第一のかかわりは、登場人物が読者に与える印象である。そして短編小説の場合、一人の主要人物に関心が集中する。これを主役と呼ぶ。例えば井伏鱒二の『山椒魚』における山椒魚がそれである。この主役に対して競争相手を立てる。これを相手役と呼ぶ。さしあたり『山椒魚』における蛙がそれにあたる。古典的な

物語の場合、時に相手役は、主役に対して悪役に立つことがある。例えば近松の悲劇における悪役を考えてみればよい。

さらに相手役とは違って、主役の行動を際立たせるための引き立て役が登場する。これは主役の、いわば随伴役と言ってよいだろう。能の、主役であるシテ役に対して、そのシテの行動の原理をなすシテヅレがこれに当たるだろう。例えば『千手前』における重衡がそれである。シテ千手は、その恋人の重衡を介添えし、重衡の死後、その菩提を弔うまでの役割を演じる。能には、シテに対立するような相手役、敵役は登場しないというのが一般の見解である。<sup>1)</sup> 今一役、残る能の役にワキが登場する。これをシテの相手役と位置づけするむきもあるが、上述したように、それは当たらない。適当な用語がないのだが、シテ登場の場面を設定する導き役とも言えようか。外に『山椒魚』におけるめだ、かのような、その他大勢役とも言える役があるが、当面これは無視してもよいだろう。

保元の乱のような動乱を描くのに、どのような役割の人物が登場するか。歴史上、登場した人物が対象になるのだが、物語としては上述したように、動乱をとらえ、それを表現するのに、おのずから人物の設定が課題となる。しかし、いくさ物語のような歴史文学にあつて、いわゆる主役や、相手役のような特定の人物は登場しない。世の変転の中に、次々と登場し、立ち去ってゆくのが歴史文学というものである。しかし現実には動乱の状況を、個々の場面においてとらえようとする場合、少なくとも、その歴史の一齣とも言うべき

場面では、必ずその場を領導する主役が存在する。この主役が存在することによって、おのずから相手役や随伴役、時には導き役が登場する。動乱を対象化し、描くために、どの人を主役とするか、だれを相手役とするかに虚構があるわけである。その意味でいくさ物語にも、各場面にそれぞれの役割を帯びた人物が登場する。

## 二 保元物語における鳥羽法皇

『保元物語』は、冒頭に鳥羽法皇の帝紀を記した後、その第一の親王(顕仁)への讓位を記し、この親王について、<sup>2)</sup>

第一親王ト申スハ配流ノ後讃岐院是也

と注記する。この冒頭文は、物語の展開に鳥羽の讓位と、それを讓られた顕仁親王すなわち後の崇徳の遷幸(保元元年、一一五六)、<sup>3)</sup> 勿論その因をなした保元の乱が物語のモチーフとなっていることを示す。以下、

大治四年(一一二九)七月七日白河院カクレサセ給テ……

と、時間を遡行し、この鳥羽の院政開始から保延五年(一一三九)

五月の美福門院腹の体仁親王の隆誕、その立太子から即位(近衛帝)、崇徳の退位、

カカリケレバ御恨ノミ残ケルニヤ一院新院父子ノ御中不快ト聞ヘシ

さらに久寿二年(一一五五)七月、思いがけない近衛帝の崩御、一院鳥羽の出家、新院崇徳の期待を裏切る四宮(後白河)の即位へと

要約法にしたがつて語り進める。この

去ル、保延五年（一一三九）五月十八日……

と近衛の隆誕から以後を記す物語の現在は、この段の最後、後白河の即位、崇徳の不和から物語を始めるための契機として、鳥羽の帝紀から崇徳・近衛、これにからまる美福門院の動きを要約的に語る時点である。近衛の没後、崇徳院はその皇子重仁の即位を期待していた。

天下ノ諸人モカク思ケル所ニ

それがはずれた。この世の人々の予想に反した方策に出た美福門院と、それを支持した鳥羽院の行動のゆえに、

是ニヨリ新院御恨今一入ゾ増ラセ給ゾ理ナル

と、新院の〈御恨〉が始まったと、世評を介して新院崇徳の思いを語る。

しかし、続いて時間は〈久寿二年冬ノ比〉に移り、鳥羽法皇の熊野参詣、権現のお告げに明年の法皇の崩御の予告、さらにその没後の戦乱を予告し、巫女の権現神託の解釈を示して、

法皇御心中サコソカナシク被思食ケメ還御ノ御有様御心細クゾ  
覚ケル

と、語り手の視点は鳥羽法皇に接近する。やがて神託通りの法皇の崩御、それを受けとめる美福門院の

玉ノスタレヲカカゲテカケテ龍顔ニ向奉り……

という修辭を駆しての回想には、語り手の女院への同化が見られる

が、一方、新院崇徳についての

新院ノ御心中ヲボツカナシトゾ思アヘル

の〈思アヘル〉の主体は、その前、美福門院の思いを介して法皇の崩御を悼む〈九重上下〉〈近習ノ男女〉で、その心中を語るものと言つてよい。近衛帝崩御後の人々の、重仁親王ひいては崇徳への慮りがあったがゆえに、法皇の没後、崇徳がどのような思いをなすかの不安が一層つるることになる。物語が少し進んで後、新院と主上後白河の対立が明確になる頃、頼長から立てられた使者盛教を新院が召し、

何事ヤラン仰ケリ

と思わせぶりに記して

新院御書ヲ内裏へ進サセ給御使武者所近久也内ヨリ御返事アリ  
又重テ御書アリ今度ハ御返事モナカリケリ

とし、両者の間のやりとり立ち入らない。それはやはり語り手が、新院の心中をおしはかるがゆえに、新院がどのような動きに出るか不安が、そのような事態を語り尽くせない表現となったものである。語り手の崇徳院側への思いには距離がある。そう言えば戦闘に備える官軍の手分け以下、状況の推移は、多く主上側に視点を置く形で展開する。一方の新院側の動きについては、平馬助忠正らが召還されるが参上しない。実はこの度の討手の  
大将トゾタノマセ給ヒケルトゾ聞エテケル  
のように、伝聞の姿勢が顕著である。

## 三 崇徳院への語り手の思い

動乱の契機として鳥羽の進めた後白河の即位があり、それゆえに崇徳の行動に不安を抱く語り手は、崇徳の戦闘への動きを語る間、崇徳との間に距離をおいていた。しかし、これが物語の中巻、崇徳側の敗色が濃くなる頃から、語り手の視点は崇徳側へと接近してゆく。

為義・季能らを具して如意山に入る新院の行方を語る語り手は、  
 〈御有様実ニ目モ当ラレズ〉と、その心情を直接吐露する。ついに新院は、山中で絶え入る。法師に乞い受けた水によりようやく正気をとりもどす。為義は追手の迫ることを言って進进行を促すが、新院は〈御身ノハタラカヌゾ〉〈我ヲバ只是ニ捨進テヲノレラハ何ノ方ヘモ落行テ扶リ候へ〉と促す。同行者があれば、敵に降伏を乞うことも困難との仰せに、やむなく為義らは落ちて行くが、かれらの思いを語り手は

サコソハ心弱カリケン月トモ日トモ仰進ツル院ニモ離進セ左府  
 ニモ別進ケレバ東西モクレテ行前モ不見

と、為義らに同化して、その思いを語る。そしてこれを追い求める官軍については、

白河ノ頭ナル山林シニ三ヶ所ヲ困テサガセ共御座サネバ返ニケ  
 リ

と、官軍を語り手の場から外側に置いてかれらを語っている。

重仁親王の出家、新院の讃岐遷幸にも

道スガラモ浦々島々由アル所モ被御覽バオノヅカラ御慰モ有ベ  
 キニ屋形戸ヲモ開ネバ月日ノ光モ障リテハゲシキ風ノ音荒キ浪  
 ノ音計ゾ御耳ノ余所ニ聞食ス

という道行は、

爰ハ須磨明石ト申ケレバ行平中納言被流テ何ナル罪ノ報ニテト  
 嘆ケン所ニコソトゾ

行平や大炊廃帝の悲しい故事を新院に重ねて語る。このような新院や重仁親王の悲話の根底に、焼け落ちた三条烏丸の御所から発見された〈御手箱〉の封じ文、〈御夢ノ記〉に、

毎度奇異ノ事限り注置セ給タリ御夢ノ記ト申ハ重祚ノ告ナリケ  
 リ重祚アル度ニ御願ヲゾ御心ニアマタ立サセ給タル

という。ここで新たに実は新院に重祚の思いのあったことを語る。上巻では、語り手の視点が主上、後白河の側にすえられていたために明らかにされなかった、人々の思いを介して想像されるしかなかった新院の思いが、中巻に及んで語り手の視点が接近するがゆえに、この隠された事実が明らかにするのである。

以後、讃岐に到着した、その地での新院の思い、この新院を松山の地に訪れる蓮如、さらに、新院没後に西行が弔うことにより、

怨靈モ静リ給フラムトゾ聞シ

として、とにかく物語としては崇徳物語が完結する。特に新院の生前、〈日本国ノ大悪魔ト成ラム〉との誓いから

中二年有テ平治元年十二月九日夜丑刻ニ右衛門督信頼ガ左馬頭  
義朝ヲ啐テ……

は、早くも後日の平治の乱を見越しての、その結末をも、この保元の乱の新院の怨霊の祟りによるとする先説をなすものである。言い換えれば、物語のモチーフとして新院の怨霊が存在することを語るものである。改めて、物語の冒頭の鳥羽と美福門院による皇位継承が乱の原因をなしたとする理解が色濃く浮かびあがるわけである。

#### 四 中巻の構成法

なお、ここで中巻の構成法について付言しておきたい。

第一類本によれば、中巻を主上方義朝・清盛軍の、新院方が待機する白河殿への夜討ちを以て始め、ついで敗北した新院方の敗走、義朝軍の新院御所焼討ちへと、主上側と新院側との動きを交互に積み重ねる形をとる。このような、必ずしも物語としての方法を整えていない構成のあり方が、例えば忠実が南都へ落ち、関白忠通の氏の長者任官など主上側の論功行賞を記した後、

十二日左大臣殿未ダ死終給ワズ

と、重傷を負った頼長の行方を唐突に語る。この頼長の負傷は、新院の動きを隔てて、その前、一行が白河殿を落ちるところで、八只事ナラズ神矢二当セ給タル歟」と人々に評される形で語っていた。内容的にはそれを受けるのであるが、この段のへ十二日左大臣……はあまりにも唐突である。これは所詮、日録のスタイルをとるもの

で、従来、第四類本と異なり、第一類本に記録性が濃厚であると言われた所以である。

#### 五 頼長への語り手の思い

後白河の即位の後、鳥羽の病があつくなり崩御になると、新院が謀叛を決意する。それを上述の通り、

新院ノ御心中ヲボツカナシト思アヘル

と人々の思いを語り、

依之禁中モサハガシク院中モササヤク事ノミアリ

とし、詩歌を遊ぶ兄忠通と違って、かねがね「仁義礼知信」を尊ぶ経学を心掛ける弟頼長が、その新院の思いに目をつけ、

新院ノ一宮重仁親王ヲ位ニ即奉テ世ヲ新院ニシラセ進テ我ママ

二天下ノ事ヲ取り可付ト

思い立つ。此の新院と頼長の動きを、

其比如何ニトヤラン人口様々ナリ貴賤上下何ト聞分タル事ハナ

ケレドモ洛中ハ静ナラズ……コハ何事ゾヤ設ヒ新院国ヲウバキ

給トモ先院ノ御晏霞僅ニ十ケ日ノ内ニ此御企ヤアルベキ崇廟ノ

御計凡下ハ難計事也一院隠サセ給ハズバ只今カカル事ヤアルベ

キ雲上ニハ星ノ位シヅカ海中ニ浪ノ音和ナリツル御世ノ角ク切

テ次ダル様ニサハギ乱ル事ノ悲サヨトゾ嘆キアヘル

と、不安を人々の噂を介して語る。

その新院が為義を召して、万一敗北の場合にまで備えて戦術を語

らせる。頼長は、その為義の申し状を褒め、為義に

汝等樊会ガ思ヲ成テ命ヲ軽クセン事鴻毛ノ如クシテ莫太ノ勲功

ニ誇候へ

と戦勲を促す。この両人の対応を

誠ニ為義ガ申状左府ノ仰事スキ無ゾキコヘシ

として、語り手の視点は頼長を離れない。結果的に頼長は負傷し、

父忠実が苦境に陥る。そしてその頼長の死を知った忠実は、

御袖顔ニ押当テ御涙ニ咽テシバシ物モ不被仰、近ク参レト(経

憲を)召テ、何ニヤ死ニケルナ、言置ク事ハナカリケルカ、我

身カウ成ニ付テモ子共ノ事何ニ覚束ナク思置ケン、何計カ此世

ニ執ノ留ケンナ、サリ共暫ハ死ナジ物ヲト思テコソ見ザリツル、

サテハ死ニケル事ヨ、我膝ノ上ニテ死スベカリケルニ、只今死

ニケル者ニ合デ入道ガ口事ヲナシケルクヤシサヨ、哀レ撰政関

白ヲモシテ、天下ノ事ヲ今一度取行ハンヲ見聞トコソ思シニ、

命ノ長キも由ナキ事ニテ有ケリ。カカル事ヲ見聞ハト被仰モ終

ズ泣セ給フ。

と、忠実の直接話法を通して、その頼長への哀惜の念を語っている。

謀叛の始めに、人々の不安を通して疑念を呈しながら、もともと鳥

羽と美福門院の判断がからまる皇位継承に挫折した新院、それに加

担した忠実、頼長父子への語り手の哀惜の情がある。

新院に召されて、この忠実・頼長の側につくことになる為義は、

一旦、拒辞する。使者教長に対し、そのわけを

為義ハ昔ヨリ君ノ御護ニテ被召仕候ヘドモ、手ヲ下シテ事ニ合

タル事僅ニ二ケ度コソ候へ、一度ハ為義十四ト申ス時……一度

ハ為義十八ノ時……鎮テ進ナンド仕候シカバ、合戦ノ道ニ調練

不仕シテ無案内ニ候ナリ

とし、代わりに「可然弓取ト生レキツタル」子息、為朝を推す。嫡

子の義朝は「弓矢ノ道與儀ヲ極」めているが、「内裏へ被召」てい

るからである。ただそう言いながらも為義は、実は先祖から相伝し

ている「八両ノ鎧、風ニ吹レテ四方ヘチルト夢想ノツゲ候間、旁憚

多候」と語る。この為義の悪夢は、ここで二人の子息を敵味方の両

方に分けざるをえなくなつた為義の悲劇を予告して語るもので、こ

の後、つぶさに体験することになる一門の離散、ひいてはみずから

の運命を予告するもので、物語の構想の一環をになうものである。

忠実・頼長と行動を共にする為義ながら、かれには悲劇の色が濃

い。その為義の紹介により為朝が登場する。

## 六 剛にして思慮ある為朝

為義は新院からの使者教長に対し、上述の通り、長男義朝が内裏、  
後白河帝側に参っていることを言い、

其外子共アマタ候へ共、一方ノ大將軍ト可被仰付奴原候ハズ、

又八郎ニ当リテ為朝冠者、此間九国ニテ生立テ弓箭ノ道不暗候

へ、今年十七カ八カニ罷成テ、タケウ勇メル者ニテ、兄義朝ニ

モヲトラジ

と言ひ、その人並みはずれた強弓であること、そのために「余二不用二候テ」、九州へ追ひ下したところ、各地で戦いをいどみ、

三年二九国ヲシタガヘテ、上ヨリモナサレヌニ、我ト鎮西ノ惣追捕使ニ成テ、今年六年二候ツル也

この為朝のゆえに、わが身為義は解官の憂き目を見たと言ふ。

この後、新院勢が御所のそれぞれの門を固めるところでは、為朝が特に「只一人大事ノ門ヲ承ハ」ることを言ひ、ここで地の文で

抑筑紫八郎、如何ナレバ兄弟ノ中ニ被召拔テ、只一人大事ノ門ヲ承ハルヤラン、ヲボツカナシ

と、改めて、この為朝が

サナクテ余ニ不用ニテ兄弟ニモ所ヲモヲカズ、ヲソロシキ者ナリ、サレバ父為義是ヲ見テ、都ニヲキ身ニ添ヘテハ、悪カリナント思テ追クダス

と父為義を煩わせたことを後説法を以て回想する。これは前に為義が教長に為朝を紹介して語っていたことの繰り返りである。ここでは重ねて地の文で「為朝ガ有様、普通の者ニハ替テ」として、その並外れた体軀、長さ・太さともに異常に大きい弓矢を使用することと言ひ、詳細にその矢羽、矢はずの形状、鏝、太刀のさまを描写し、如何ナル行疫神ナリトモ眼ヲ合スベキ様ナシ、ソラヲカケリ地ヲ走ル物、目ヲ懸ツルニ射トメズト云事ナシ、将門ニモ勝レ純友ニモ超タリ

と最大級の語りを行っている。ここで改めて為義が御前に召され、

為朝を同行して進み出、「合戦ノ次第」、作戦を頼長に諮問される。答えて為朝は「先例ヲ思ニ、夜打ニハシカジ」と夜討ちの奇襲を言する。この為朝を語る語り手は、その場の為朝の偉容を、

彼東八毘沙門ノ如シ、アタリヲ払テ見ヘケル、誠ニラビタタシト、語り手の感嘆の念を介して語る。結局、頼長の反対にあつて為朝の夜討ち進言は却下されるが、

京中ニハ貴賤上下皆々ノシリテ、今夜合戦アルベシ、如何アランズラントサハギ迷ケルモ理ナリ

と、「貴賤上下」の視点を以て為朝の偉容を受け止め評しているのである。

結果的に逆に義朝側からの夜討ちを新院側が受けることになる。ところが

河原ノ門ヲ固タル為義ガ子共六人先陣ヲ争ヒケリ

という事態になり、特に頼方が「我コソ此中ニハ兄ニテ、前ハ蒐ベケレ、我ナラデハ誰カクベキ」と思う。為朝も一時は

我程ノ兵ガ有バコソ、我ガ蒐デハタガ蒐ベキゾト思

い、「畚シハ争」つたが、「八郎思ケルハ、更ヌダニ判官殿、幼少ヨリ兄弟共ヲ押ノケテ、我一人世ニ有」らんとした、そのために勘当された。それを今ゆるされて参るのに、ここで「兄ニ争イカケタラシモ悪シカリナン」と反省し、兄たちに先陣を譲り、万一「但弱リ給」ん時、その備えに「力ヲ合セ奉ラン」と待機する。

そうは言いながら、清盛軍の進撃に、伊藤五郎・伊藤六郎兄弟が

為朝の陣に矢を射懸ける。その矢が為朝の(ヘネリツバノ太刀ノ股寄ニゾ射止)まるが、為朝は答への矢を射返す。その矢はまず伊藤六郎の鎧の胸板を射抜き、続く伊藤五郎の射向きの袖を射抜く。伊藤六郎は落馬して即死、伊藤五郎は、その矢を射立てたまま清盛の前へとつて返し、

是御覽候へ、筑紫ノ八郎殿ノ弓勢ノイカメシサヨ、凡夫ノ態トモ覚ズ、是ハ伊藤六ガ胸板ヲ射通テ某ガ射向ノ袖ニ裏カイテ候、カカル弓勢コソ未見候ハネ

と、伊藤五郎のこぼれを通して為朝の弓勢のすまじさを語り、(安芸守ヲ始トシテ、兵者共物モ申サデ舌ヲ振テラヂアヘリン。伊藤は重ねてその弓勢を、義家の強弓を想起して語る。この後、清盛配下の山田小三郎是行という(ヘソバヒラ見ズノ猪武者)が進み出で、(三代ニ成ル)みずからの鎧を以て為朝の弓勢を試してみようと言い、その下人が引き止めるのを振り切つて出ようとす。ここでその武装を

黒糸威ノ胄ノ盛少過タルニ、鉄形ノ甲居頸ニ著ナシテ、クロホロノ矢ノ十八指タル頭高二負成テ、二所藤ノ弓ヲ持ママニ、鹿毛ナル馬ニ黒鞍置テゾ乗タリケル

と黒づくめとして描く。山田は名乗り、聞へサセ給フ御曹司ヲ只一目ヲガミマキラセバヤ、御矢一給テ、死候ハバ後生ノ訴ニ仕リ、生テ候ハバ現世ノ名譽ニ仕候ベシト存テ参タリ

と言う。為朝は乳母子の須藤と相談し、まず相手に二本の矢を射させておいてから、返しの矢を射ることに決める。ここで為朝の武装を

白地ノ錦ノ直垂ニ唐綾威ノ胄ノ午時計ナルニ、辰頭ノ甲キラメカシテ、長服輪ノ太刀ハキテ、山鳥ノ尾ノ藤ノ皮ニテハイダ爾矢廿四指タル……頭高二負成テ、節巻ノ弓ノ拳太ニテ、八尺五寸有ガ、誠ニツヨゲナルヲ以、白茸毛ノ馬ノ、七キニハズンテ太クタクマシクシテ、尾髪極テタクサンナルニ、金服輪ノ鞍置テゾ乗タリケル

と描く。前の山田の黒づくめに対し、この為朝の白と金が対照的に使われていて、明らかに両者をまず武装の上で対比しようとする。この対比がすでに両人の結果を示唆していて、事実、是行はまず一の矢で為朝の草摺を射抜く。返す為朝の一本の矢を草摺から尻輪に受け、二の矢をつがえようとする間もなく失神して落馬し果てる。語り手は、この山田の最後を、

武者ノ心ノ余二甲ナルハ、シレタリトハ是等哉申ベキと語り結ぶが、この語りの評言は、前に(ヘソバヒラ見ズノ猪武者)と評していたのと呼応する。

この後、白河殿を攻める義朝の同行した、その乳母子鎌田も為朝に追われ、ようやく義朝のもとに帰参して、(アヘグアヘグ)

正清東国ニテ数度ノ軍ニ逢テ候ヘ共、是程ニ馬ノ足騒ク、軍立ケワシキ敵ニマダ合候ズ、今ハカウトゾ覚候ソル……



ヲノレハ何ク迄々ト責懸給ツル馬ノ足音ハ、雷ノ落懸ル様ニコソ覚へ候ツレ、アラヲソロシ

と語らせている。

このように為朝に対決しようとする群像を描くことにより、結果的に為朝像を引き立てることになる。強弓の評にふさわしい武装、その豪快な行動において傑出しているだけではない。例えば白河殿に寄せ来たった兄義朝に対決する為朝は、

下野守(義朝)人ニモ勝テ居長高二テマツ向内甲ノ程射ヨゲン  
見ヘケレバ、例ノ崎細ノ矢ヲ指食セテ、打傾テ雲透にミレバ、  
只一矢ニ内甲射テ射落サント打上テ引ケルガ

〈待々シバシ主上上皇ト申モ御兄弟ニテ渡セ給〉、為義と義朝も父子の仲であり、しかも今や義朝は主上方に参り、父為義は新院側に参っている。もし主上側が勝てば、父為義は義朝を頼って降参しよう。逆に新院側が勝てば、父が義朝を助けようと、あらかじめ約束していた。

爰ニテ(義朝を)射落シテハ後悔可有  
その上、久しく父子より勘当を受けていた自分が

兄ヲアヘナク射殺、重テ不孝セラレテハ如何アラント思直テ  
矢をはずす思慮を有している。語り手は〈為朝ガ心ノ内、ヤサシウ情ヲ弁ヘタリケル〉と評している。為朝は、ただでも小勢の味方が、東西に隔てられては防ぎようもあるまいとひきしりぞき控える。これに対し、一方の義朝は、弟為朝の思慮をおしはかることなく、

下野守殿勝ニ乗テ、責ヨク息ナクレソ、死ネヤクトゾ下知シ  
攻めかけたと言う。

上述したように、鳥羽院の崩御を契機に失意の崇徳の側の反乱、悪左府と評価される強烈な個性ゆえに身を滅ぼすことになる頼長の行方を見とどけながら、語り手は為朝と義朝を相対立する役割として登場させ、義朝よりはむしろ為朝の側に共感の情を寄せて語り進めている。

## 七 無為無策の為義と義朝

上述したように、下巻は、乱後の終戦処理から敗者の行方を語り進める。

清盛の追及に、為義は一旦、坂本三河尻に身を潜めるが、重病をえて前後不覚に陥る。馬に乗せられて落ちるが郎等にも見捨てられ、近江の葦裏では乗船間際に敵に攻められ、戦わずして一行、四散する。為義は思い返して東坂本にとつて返し、比叡山に登り月輪坊の堅者の坊を訪ね、出家をとげる。そこへ六人の子息が訪ね来たり、中でも為朝は、

サテシモ山にヲワスベキ事カ、坂東ヘ下ラセ給ヘカシ、今度ノ  
軍ニ上リ合ヌ義明・畠山庄司重能・小山田別当有重等ヲ大政大  
臣・左右大臣・内大臣ニモ成シ、是等カ子共ヲ大納言・宰相・  
三位四位五位ノ殿上人ニ成シヲキ、将門ガシタリケル様ニ我身  
ヲ親王ト号テ、奥ノ基衛カタライテ、ネズノ関ヲ堅サセテ、奥

大將軍ニハ四郎左衛門ヲ下申、海道ヲバ掃部権助ニ堅メサセ、  
 中山道ヲバ七郎殿ニ固メサセ申テ、坂東ノ御後見為朝シテ、世  
 中ナドカスギザルベキ

と申したと言う。将門になぞらえる不吉さはあるにしても、豪快な、  
 行動力豊かな為朝像たらしめている。この為朝像は、後日かれが流  
 罪に処せられ島で殺される、その首が京へもたらされる、その首に  
 対し、

源ハタヘハテニキト思シニ千世ノ為トモ今日見ツルカナ

と落首が詠まれ、へ為朝が上コス源氏ゾナカリケル」と評されるに  
 ふさわしい。にもかかわらず為義は、

若ク盛リナリシ時、陸奥守ニ成ラテ、今老衰へ朝敵ト成、出家  
 入道ノ後、其ホドノ可有果報共不覚、如何シテ病モ直リ命ヲモ  
 扶ルベシト思ニ、一日モ忍ブベシ共不覚、我身ノ合期シタラバ  
 コソ、子共引具テ東国ヘモ趣キ、山野ニモ籠ラメ、サレバ清盛  
 ハ伯父忠正五人法師ニコソ成タレ共命計ハ扶タン也、下野守ハ  
 今度ノ勸賞ニ左馬頭ニ成タン也、勲功ニ申替ナドカ父一人ヲ扶  
 ケザルベキト思ヘバ、為義ハ義朝ガ許ヘ頭レテ行テ、命計ヲ申  
 請ヨト言テ世ヲ渡ラント思ゾ、如何カ可有

と思う。上述の将門をも回想しての豪胆で執念深い為朝の戦術に比  
 べて、この為義の判断は先の見通しに欠ける。行動を共にする兩人  
 でありながら、為朝と為義の対比的な描きわけは顕著である。すな  
 わち、この後、為朝は喜んで父を迎え入れるが、宮中で合議の末、

信西の主張により、首謀者全員の処刑と決定する。

実は平馬助忠正法師、新院藏人長盛、皇后傅長忠綱、左大臣勾当  
 正綱、平九郎道正の五人、いずれも清盛にとつては従兄弟に当たる  
 が、それらが清盛を頼り、

サリ共命ヲ助ザランヤト思テ

やって来たのを、清盛はへ無左右伯ヲ切つてしまった。その清盛  
 の行動を、語り手は

扶ケント思ハンニハ安ク申免スベカリケレ共、伯父甥ノ中悪ア  
 リケル上、清盛ガ伯父ヲ切ナラバ、義朝父ヲバ切ランズラント  
 和譏ニ構テ切テケリ

と説明する。へ和譏の語については、この所を第四類本の金刀比  
 羅本が

此忠正と申は、清盛が伯父なりければ、申預て助たりけるを、  
 我伯父を切らずは、義朝父を切事よもあらじと思ければ、信西  
 に内々いひ合て、清盛申請て切けるとぞ聞えし

とするのが参考になる。義朝の父為義の処刑を執行させるため、清  
 盛が信西としめし合わせて忠正らを処刑したと言うのである。乱の  
 当初から、義朝と為朝の兩人の対比的描き分けは顕著であった。乱  
 後、為朝は巧みに近江の山寺に潜んでいた。不本意にも

重病ヲ受ケテヤミ伏タリケリ、郎等一人法師ニ成シ、乞食ラシ  
 テ日ヲ送ル

近くの温泉で湯治していたところを、佐渡兵衛尉重貞の密告により

入浴中を捕らえられる。結果、流刑に処せられるが、

只息災ニテ流タラバ末代ニモ又朝敵ト成ナムトテ、脾ヲ抜トゾ被仰ケル

しかも、ここでも、またもや

義朝ガ給テ左右ノカイナヲ抜ク

と、義朝が不利な役を演じることになる。

この度の義朝の無策は、この後、為義の処刑にひき続き、乙若・亀若・鶴若・天王殿の四人の弟を手に懸けて処刑せざるをえなくなるところまで持ち越される。事を知った九歳の鶴若は、義朝に使者を立て、翻意を促そうとするが、十三歳になる乙若が、

何ニモシテ助クベキ父ヲ切程ノ不当仁ガ弟共ヲバ、何トカ思ハシ、……哀下野守ハ悪クスル物哉、是ハ清盛ガ讒奏ニテコソ有ラム、親ヲ失ヒ弟ヲ失ヒ終テ、身一二成テ、只今源氏ノ胤ノ失ナンズルコソ不便ナレ、二年三年ヲヨモ出ジ

と言つて、泣きいる弟たちをたしなめる。この乙若の発言は、この保元の乱があつた保元元年から三年後の平治の乱での義朝の敗北と、その死を予告するものである。すなわち、語り手は、平治の乱後の行方をも射程に置いて、乙若にこのような予言を行わせているのである。

後日、讃岐に流された新院の崩御とその怨念を語り、

中二年有テ、平治元年十二月九日夜丑刻ニ、右衛門督信頼ガ左馬頭義朝ヲ啖テ、院ノ御所三条殿ヘ夜討ニ入テ火ヲ懸テ、小納言入道信西ヲ亡シ、院ヲモ内ヲモ取進テ、大内ニ立テ籠テ、叙

位除目行フ、小納言入道ハ山ノ奥ニ埋レタルヲ掘ラコサレテ首

ヲ被切、大路ヲ渡サレ、獄門ノ木ニ被懸シ事、保元ノ乱ニ多人ノ頸ヲ切セ、宇治ノ左府ノ死骸ヲ掘ラコシタリケル其報トゾ

覚ヘタル、信頼卿軍ニ負テ六条川原ニテ被切ヌ、義朝方ノ負シ

テ都ヲ落テ、尾張国野間ト云所ニテ、長田四郎忠致ガ為ニ被討

ニケリ、一年セ保元ノ乱ニ乙若ガ云シ詞ニ少モ違ヌ

とするのは、物語が進行する現在時点から見て、明らかに平治の乱を先説するもので、このような物語としては異例の時間処理を行う裏には、物語における信西や、見て来たような義朝像があるからである。物語を

保元ノ乱ニコソ親ノ頸ヲ切ケル子モ有ケレ、伯父ガ頸ヲ切甥モアレ、兄ヲ流ス弟モアレ、思ニ身ヲ投ル女性モアレ、是コソ日本ノ不思議也シ事トモナリ

と結ぶ。へ思ニ身ヲ投ル女性」とは、為義の北の方を指すが、清盛や義朝、特に義朝の身の処しように、源氏一門の分裂をとらえ、これを不思議とするところに、物語の主題があると言えるだろう。

#### 注

(1) 野上豊一郎の一連の能楽論。

(2) 以下、『保元物語』は古典研究会の半井本による。

(3) 野中哲照『保元物語』における語り手の〈現在〉(『国文学研究』一〇二)は平治の乱から治承三年のクーデターにかけて社会を脅かした崇徳院の怨霊に物語のエネルギーを見ている。